

1) No.1孔

・サイクル 4と3

主体はかつて山側に流路があったときに流路を充てんした堆積物であり、4と3の間に挟まれるK-Ah火山灰近傍の旧表土を挟む細粒相は氾濫原の堆積物と考えられる。ここで、K-Ah火山灰以降の時代に生じた海退の影響は、層相変化からは読みとれない。むしろK-Ah火山灰堆積時に離水した後で、サイクル3で示される厚さ5m以上の堆積物がこの場に定置するには、何らかの沈降運動が必要と考えられる。

・サイクル3から2への変化

流路の放棄(上流での斜面崩壊による堰き止めによる北側への流路変更の可能性が高い)と堆積盆の隔離を示すと考えられる。

・サイクル2

比較的安定した静穏な堆積域(後背湿地)に、時折南側の山地から斜面崩壊による堆積物が供給される環境である。斜面崩壊の要因は特定できないが、間に挟まれる地層の厚さと形成時代間隔(5,600年BP~2,110年BPの約3,500年間)からみて、数100年~1,000年オーダーの間隔で崩壊が生じているとみられる。このような斜面崩壊は、断層運動に起因する可能性が考えられる。

・サイクル2から1への変化, サイクル1

所々に離水した層準を挟み、その直上から始まる厚さ1~2.6mの細粒化サイクルが重なって、大局的には上方への粗粒化を示している。既に2の始まりで、この地区の流路が放棄され、その後現在まで流路が復活していないことを考慮すると、このような層相変化は、大局海退傾向という規制の中で、北側に移動した流路から溢流した流れによる堆積物の累重とみることができる。

ただし、海進のピークから現在までの海水準低下量は、最大でも4m程度(千田,1987)であることから、この場合も現在みられている厚さの地層が形成されるには、サイクル3の場合と同様に、何らかの形で堆積盆の沈降が生じる必要があると思われる。

このような沈降イベントが存在したとすると、それに対応する層相変化としては、離水した旧表土の直上に朝見川から供給された、葉理が発達した堆積物が重なるという現象が、最も考えやすいと思われる。

## 2) No.2孔

大局的には 1孔と同様の層相変化がみられる。

### ・サイクル 4' から 3'

No.1孔付近にあったと想定される流路から溢流した流れによる堆積物と考えられる。K-Ah火山灰層準を海進のピークとする海進 海退の変化は 8 7 6 の層相変化に対応する可能性がある。この内、7 から 6 への変化は、No.1孔での 4 から 3 への変化は対応するとみられる。

5 の層相は側方へ連続せず、No.1の 3 の層相に対する局所的な後背湿地的環境を示すと考えられる。

### ・サイクル 3' から 2' への変化

この変化は、1孔での 3 から 2 への変化に対応している。

### ・サイクル 2

1と同様に比較的安定した堆積域が形成されており、その中に間欠的に側方斜面からの堆積物(粗粒砂程度、1孔より細かい)がもたらされている。

### ・サイクル 2 から 1 への変化, サイクル 1

急激な粗粒化として認定できるが、1 の最下部の1.1m分は、上位相と異なる上方粗粒化相であり、一時的な小流路の形成ないし大規模な溢流を示すものと考えられる。

1にみられる、サイクル 1 中での離水層準直上に河川成堆積物が重なる現象は、ここでは、泥炭層上位に粗粒相が重なる現象に対応しているとみられる。

このように、No.2孔の層相変化は、一部を除き、1孔での層相変化に対応したものになっている。

---

氾濫原という環境を考慮すると、旧表土の上に舌状に上方へ凸の断面形状を有する地層が累重する可能性は否定できないが、堆積盆の沈降がない限り、このような地層は、削剥され消失してしまうはずである。

以上の考察をもとに、1孔での層相変化から断層イベントを示す可能性のある層準を抽出すると、下位から順に次のようになる。

	標高 (EL.m)	層相変化	上下方向の 推定変位量 (m)
イ	-16.4	離水層準直上に流路充てん堆積物が重なる No.2孔では、この上下にもイベントが考えられる。	(5.8?)
ロ	-10.6	流路の放棄、側方からの斜面崩壊堆積物の供給	1.9
ハ	-8.7	側方からの斜面崩壊堆積物の供給	1.9
ニ	-6.6	側方からの斜面崩壊堆積物の供給	1.9
ホ	-4.5	離水層準直上に水成堆積物	1.9
ヘ	-2.9	"	1.6
ト	-0.3	"	2.6
チ	0.6	"	0.9
リ	1.5	"	(4.2?)

変位量は1つ後のイベント層準との間の層厚ないし、現在の分布深度から算出した。

この結果からみると、断層では、上下方向で約2m/1回の変位量を有する変位が繰り返して生じていることを示唆しているように見える。イ と リ で大きな変位量の値は、このような断層変位が複数回含まれていると説明できる。

以上の検討をまとめると、K-Ah火山灰(6,300年BP)以後に少なくとも9回の断層活動イベントがあったと推定される。Yf火山灰(2,000年BP)以後では、3回程度と推定される。この結果と1孔での年代測定結果から算出すると、断層の平均的な活動間隔として、600~700年という値が得られる。

前述のように、ここに示した活動イベントの検討結果は確実なものではないが、一つの試みとして提示するものである。ただし、最新活動時期については、少なくともYf火山灰(2,000年BP)以後であると判断してよいと思われる。